

2023 年度成人科テキスト

「聖書日課と分かち合い」 5月号



名前

お知らせ

◇ 毎週、成人科を行っています。ぜひご出席ください。

10:15～10:50 地下フェロシップホールにて

◇ 「聖書教育」誌の購読をお勧めしています。このテキストと併せて、ぜひお読みください。ご希望の方は事務室までお知らせください。

◇ このテキストのボックスへの配布をご希望される方は、担当者（岩崎秀子姉、宇佐美典子姉、郷健人兄）までお知らせください。

ショートメッセージ動画はインターネット上でも視聴できます。

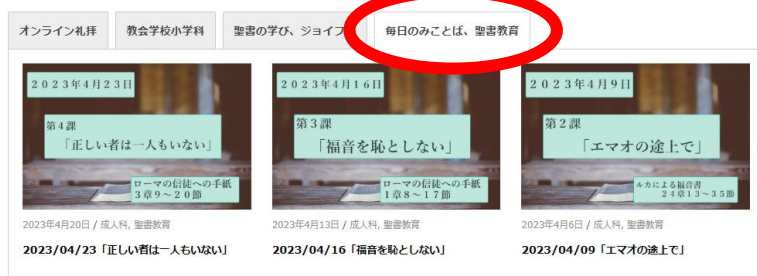
10:15のスタートには間に合わない・・・という方や、お休みされた方、もう一度聞きたいと思われる方など、ぜひご活用ください。



教会ホームページを開いて、
下の方へ進むと・・・

礼拝と教会学校

クリック！



「礼拝と教会学校」というコーナーの
「毎日のみことば、聖書教育」と書かれた
ところをクリックしてください。
直近3週分の動画が表示されるので、
見たいものをクリックしてください。



こんなページが開きます。
画像をクリックすると、再生が
始まります。

第6課「信仰によって生きる」

聖書箇所： ローマの信徒への手紙 5章 1-11節

主題聖句： わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとして
います。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。

(5:11)

今週の聖書教育誌の週題は「信仰によって生きる」です。

NHKのテレビ番組で人気の「チョコちゃんに叱られる」を一度はご覧になったことがおありでしょうか。

日常の何気なく使ったりしている言葉やしぐさに対して「何で?とか、何?」と問いかけて、解答者が答えに窮すると「ポーっと生きてんじゃねーよ!」と鋭いツッコミが入り答えを教えてください。

さて、キリスト教に関心のある人から信仰歴何年の皆さんに「信仰って何?」と尋ねられたら、どうお答えになりますか。正しくは「キリスト教の信仰とは何か」ということになります。

私たちは教会のなかで当たり前のように信仰、信仰と言っていますが意外と現実の日本社会のなかでは多くの方々が自分には縁がないと考えていたり、信仰という概念が実はよくわからない、あるいは理解できないままに家の宗教を受け継いでいたりしているのではないのでしょうか。

聖書にはその答えが書かれています。

ヘブライ 11:1

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。

ここで言われていることは、望んでいることが実現すると信じる心。見たり聞いたりする実体験ではなくても存在を感じとり信じる心。この概念は普段の生活のなかで、どなたでもごく自然に受け入れておられると思います。

このように意味合いを考えてみますと信仰とは、たとえキリストの信仰を持たなくても、すべての人が共通して生まれながらに抱いている観念となります。ですから、すべての人は誰でも信仰する心を持っていると言えるのです。

では、キリスト教の信仰とは何かと問われたとき、このようにも言えるのではないのでしょうか。

唯一の真なる神を信じること。神が約束されたことはすべて成就すると信じられること。信じる心は神からの恵みの賜物として与えられること。これらを受けとめ神に喜ばれる存在となることです。

エフェソ 2:8

事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。

人には神が創造された全被造物のうちで人間だけに与えられた「自由意志」があります。自分の意思で物事を決め判断する賜物を与えられています。それは神が愛をもって人間を神の姿に似せて創造されたからです。ですから人は神と人格的に繋がることのできるのです。この関係性が与えられていると気づき信じるときに使徒パウロが言うところの「**信仰により義(神と正しい関係にある)とされる**」のです。

このようにキリストの信仰を持つことは私たちの人生に「希望」を持つことであり、主と共にある人生には喜びと平安をもたらしていただけるのです。

しかしながら、神の側からご覧になって、私たちは「弱い者」、「不信心で神を求めない者」、さらには「神に敵対する者」であって、どこまで行っても罪人なのです。私たちが信仰を持って神に立ち返ったとしても罪人には変わりありません。「弱い者」だけならイエスさまが寄り添うことで立ち返りと救いが実現させていただけるかもしれませんが、けれども、神はそれだけでは満足なさいません。「敵である者」あるいは「不信心な者」をも「愛する子」として顧みてください神との和解を実現することを望まれておられるのです。

それには愛する御子イエス・キリストの十字架での贖罪が必要だったのです。ここに愛があります。

ローマ 5:10

敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。

あなたは「弱い者」でしたか、「不信心な者」でしたか、「敵である者」でしたか。私自身は今でもどれにも当てはまる思いを持つ罪ある存在なのだと告白しなければなりません。

イエス・キリストの十字架での贖罪が罪人である私たちと真なる神の執り成しとなり苦難を乗り越え、死を打ち破り、神との真実の和解を実現させていただけたのです。そして、御子キリストの復活の命によって私たちの命も救われたのです。

この復活の主を信じるのが、信じて生きることが私の信仰なのです。

詩篇 30:6

ひととき、お怒りになっても命を得させることを御旨としてくださる。泣きながら夜を過ごす人にも喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださる。

私たちの世界は現実には人と人の信頼を打ち壊す、打ちのめすような悲惨な出来事が繰り返し起きています。何度も「主よ、何故ですか」と叫び続ける私たちがいます。イエスさまが歩まれた時代もまさに同じ有り様でした。それでも、絶望することなく、挫折することなく、投げ出すことなくされたのはイエスさまご自身でした。

信仰に生きるとは、まさにイエスさまに倣い、イエスさまがそうなさったように私たちも生きることだと思っています。常盤台教会にはそうして信仰の旅路を歩まれた先達がたくさんおられます。私たちはその背中を追いつつ歩ませていただいている恵みのなかにあるのです。

～分かち合い～

◇ あなたは「基督教の信仰」とはと問われたら、なんと応えますか。

◇ 「信仰によって生きる」 あなたはどのように証しされますか。

(担当：郷 秀男)

5/7-13 今週の聖書日課



5月7日 (日)

ローマの信徒への手紙5章 1-11節

1 このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、 2 このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。 3 そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、 4 忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。 5 希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。 6 実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。 7 正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。 8 しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。 9 それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。 10 敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。 11 それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。

ローマ1:18には「神は天から怒りを現わされる」とありますがローマ5:1では神との平和が語られています。なぜ神の怒りが収まり神との平和が実現したのでしょうか。それは主イエスが神さまと私たちを和解させてくださり、怒りが静められたからです。それゆえ主イエスを信じる者は神との平和が回復しているのです。神との平和を得た私たちは恵みにより、たとえ多くの困難や試練に遭おうとも生きる力をいただいて希望へと続く道を歩むことができるのです。

5月8日 (月)

エレミヤ書29章 10-14節

10 主はこう言われる。バビロンに七十年の時が満ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる。わたしは恵みの約束を果たし、あなたたちをこの地に連れ戻す。 11 わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。 12 そのとき、あなたたちがわたしを呼び、来てわたしに祈り求めるなら、わたしは聞く。 13 わたしを尋ね求めるならば見だし、心を尽くしてわたしを求めるなら、 14 わたしに出会うであろう、と主は言われる。わたしは捕囚の民を帰らせる。わたし

はあなたたちをあらゆる国々の間に、またあらゆる地域に追いやったが、そこから呼び集め、かつてそこから捕囚として追い出した元の場所へ連れ戻す、と主は言われる。

「わたしはあなたたちのために立てた計画をよく心に留めている。それは平和の計画であって災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。(29：11)」神さまは真理に基づき私たちひとりひとりに計画を持っておられます。だから私たちは将来のことをあれこれと心配せずに、神さまに信頼し、いつも共にいてくださることを感謝し、その感謝の気持ちで礼拝をおささげしたらよいのです。

5月9日 (火)

コリントの信徒への手紙一 13章 4-13節

4 愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。 5 礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。 6 不義を喜ばず、真実を喜ぶ。 7 すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

8 愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、 9 わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから。 10 完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。 11 幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた。 12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。 13 それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。

生活必需品と言ってもいい存在のスマートフォン。多種多様な機能が搭載されていて、これひとつあれば生活や仕事上でとても便利です。スマートとは賢い・知識・知能という意味です。しかし知識や知能は一時的なものだから、いつかは廃れると聖書に記されています。では一時的ではないものとは何でしょう。それは神さまのみ言葉です。み言葉(恵み)は決して絶えることはありません。キリスト教の恵みの本質である「信仰・希望・愛」はいつまでも残ります。

5月10日 (水)

コリントの信徒への手紙二 5章 16-21節

16 それで、わたしたちは、今後だれをも肉に従って知ろうとはしません。肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません。 17 だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。 18 これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。 19 つまり、神はキリストによって世を

御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。 20 ですから、神がわたしたちを通して勧めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい。 21 罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです。

「神と和解させていただきなさい」とはどういう意味でしょうか。和解とは仲直りをし相手を受け入れることです。神さまは私たちが和解に応じることをずっと待っておられます。私たちにいつも善いものを与えてくださり、守ってくださるのは私たちの主なる神です、と信じて告白するならば、神さまは喜んで私たちを受け入れてくださいます。

5月11日（木）

マルコによる福音書1章9-11節

9 そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。 10 水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。 11 すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

イエスさまがバプテスマを受け、水から上がると天が裂け霊が鳩のように彼の上に降って来た。「あなたは私の愛する子、私の心に適う者」これはイエスさまが神の子として神のみこころを行うために、私たちのところに来られたことを意味しています。主イエスの贖いにより私たちの罪は赦され救いの道へと入れられ、「あなたは私の愛する子」という神の声を聞くことができる神の子とされるのです。

5月12日（金）

ガラテヤの信徒への手紙3章26-29節

26 あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。 27 洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。 28 そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。 29 あなたがたは、もしキリストのものだとするなら、とりもなおさず、アブラハムの子孫であり、約束による相続人です。

人は自分の力だけで神との正しい関係に入ることはできません。自分の罪を悔い改め、主イエスを心から信じる時神の子とされるのです。闇の行いを脱ぎ捨てて、光の武具を身に付け、主イエスを身にまとうことがキリストを着るということです。キリストを着たらもう脱がず、神のみこころに従う神に喜ばれる生き方をします。

5月13日(土)

コロサイの信徒への手紙 2章 6-15節

6あなたがたは、主キリスト・イエスを受け入れたのですから、キリストに結ばれて歩みなさい。7キリストに根を下ろして造り上げられ、教えられたとおりの信仰をしっかりと守って、あふれるばかりに感謝しなさい。8人間の言い伝えにすぎない哲学、つまり、むなしいだまし事によって人のとりこにされないように気をつけなさい。それは、世を支配する霊に従っており、キリストに従うものではありません。9キリストの内には、満ちあふれる神性が、余すところなく、見える形をとって宿っており、10あなたがたは、キリストにおいて満たされているのです。キリストはすべての支配や権威の頭です。11あなたがたはキリストにおいて、手によらない割礼、つまり肉の体を脱ぎ捨てるキリストの割礼を受け、12洗礼によって、キリストと共に葬られ、また、キリストを死者の中から復活させた神の力を信じて、キリストと共に復活させられたのです。13肉に割礼を受けず、罪の中にいて死んでいたあなたがたを、神はキリストと共に生かしてくださいました。神は、わたしたちの一切の罪を赦し、14規則によってわたしたちを訴えて不利に陥れていた証書を破棄し、これを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。15そして、もろもろの支配と権威の武装を解除し、キリストの勝利の列に従えて、公然とさらしものになさいました。

教会は「神の家」「キリストのからだ」と言われます。教会に属することは、キリストのからだ、つまり真理に属するということです。コロサイの教会にはさまざまな思想や哲学、間違った教えが入り込んでいました。真実と違った事や情報に翻弄されやすいですが、本当の救いは主イエスを信じる信仰によってのみ得られることを心に留め、そのことを感謝し、主に属し続けたいと願います。

(担当：宇佐美 典子)



第7課「キリストにあやかる」

聖書箇所： ローマの信徒への手紙 6章 1-14節

主題聖句： このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、
キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。
(6:11)

本日の箇所は、常盤台教会でバプテスマ式が行われる際に、司式が読んだり、交読文として唱和したりする部分です。バプテスマという、受けられる方にとっては大きな人生の節目であり、教会にとっては最大の喜びである瞬間に、その本質的な意味を思い起こさせる、大切な箇所と言えるでしょう。

人がいかにしてクリスチャンとなるか、そのために必要な過程は何か。キリスト教の中にも様々な考え方があり、全身を水につける浸礼（バプテスマ）がすべての教会で行われているわけではありません。しかしそれが浸礼であれ滴礼であれ、何らかの象徴的な行為を大切にしている点では多くの教会が一致します。それは、信仰を持たずに生きる人生と、神に従い歩む人生は、全く異なっているからです。なんとなくクリスチャンになる、気が付いたらクリスチャンになっている、ということではなく、今日これをもって新しい人生を主から頂く、という重大な転換点。その象徴として浸礼等が行われ、その日を第二の誕生日と呼んだりもするので

では、その「神に従い歩む人生」と「そうではない人生」の間にある違いとは、何なのでしょう。あらためて言葉にしようとする、少し考えこんでしまうかもしれません。本当はここでいったんショートメッセージを止めて、皆さんにお聞きしたいくらいです。きっとそれぞれの、信仰の証しが表れてくると思います。

パウロはこの違いを、常に「罪」と「義」の対比で捉え、語っています。罪とは、必ずしも犯罪的な行為や道徳的な逸脱のみを指すわけではなく、神から目を逸らした生き方そのものが罪と言えます。そして義とは、二度と一切の罪をおかさないう人間になったり、過去の過ち全てが「なかったこと」になったりするのではなく、神を仰ぎ見る生き方そのものが義なのです。そして、罪から義へと生まれ変わるには、キリストであるイエスに結ばれる必要があると語っているのです。

今日の箇所の手前で、パウロはアダムとイエスについて語っています。最初の人間アダムが罪を犯したことにより、全ての人間は罪と共に生きることとなりました。たった一人の人間によって、その先全ての人間が罪に定められたのです。であれば、キリストであるイエス、神の子であるイエスによってもたらされた義は、それを遥かに上回り、多くの人々を救いに導くと言うのです。

イエスの十字架による贖いが、その出来事より手前（過去）にだけ作用するのではなく、その先（未来）にまで波及していくということ。イエスさまは果たしてどこまでそのおつもりがあったのかなあ、人間が後から勝手に意味づけをしているだけではないのかなあと考えてしまったことが、個人的にはあります。しかしイエスさまご自身のお言葉や、パウロたちのこうした解き明かしを読むと、その思いがいかに間違っているか、よく分かります。十字架の贖いは、確かに今を生きる私たちにも及んでいます。

6章の冒頭、「恵みが増すようにと、罪の中にとどまる」というのは、体をできるだけ泥で汚しておけば、石鹸がいっぱい貰える、だから敢えて目いっぱい汚した方がお得だ、というような発想でしょう。また、人間は罪を犯し続けてしまうので、それを洗い続けなければいけない、その歩みに終わりはない、という考え方も背後にあるはずです。これでは結局、罪に支配された人生のままです。私たちはイエスさまの十字架を通して、罪に対して死にました。人間の弱さを思うとき、罪を全く犯さなくなった、とは言えないでしょう。しかし罪の意識だけに囚われた人生から解放された、という意味で罪に対して死に、新しい命に生きるのです。イエスさまの死と復活が、私たちにその新しい生き方を示してくださったのです。だからこそ、バプテスト教会は浸礼を大切にします。罪に対する死と、新しい命への復活を表すためです。

80年代から90年代にかけて人気を博したロックバンド、THE BLUE HEARTSの代表曲「青空」にはこのような歌詞があります。

「神さまにわいろを贈り 天国へのパスポートをねだるなんて 本気なのかい？」
直接的にキリスト教を批判しているかは分かりませんが、頭の片隅にはあったのだと思います。私がこよなく愛するバンドだけに、この歌詞には何度か心を揺さぶられてきました。しかし何度考えても、信仰を持つことが「天国へのパスポート」を「ねだる」ためにしているとは、思えませんでした。あえて喩えるならば、神へと続く方位磁石を受け取る、ということが一番近いかもしれません。

さまよい続けた人生から、決して変わらない指針を受け取り、自分の歩むべき道筋を見出すこと。再び迷子になることも時々、いや、しょっちゅうかもしれません。それでも、この方位磁石を手放さずに生きればまた正しい道に帰ってくるができる。さまよい続ける不安とは、もう無縁です。

この平安を、一人でも多くの方と分かち合っていきたい。それが教会の願いです。だからこそ、誰かがバプテスマを受ける姿に心から「おめでとう」と感じるのです。

パウロは、私たちが自分の体を「不義のための道具」とせず、「義のための道具として神に献げなさい」と語ります。どうすればその言葉通りになるのか、これもまた考え出すと難しい問いです。しかし、まだ神さまを知らない人々に伝道し、バプテスマへ、そしてその先に待つ喜びの人生へと導くこと。これは間違いなく、神さまの御用を成すことでしょう。バプテスマはその見た目もあって壮大な印象を人に与えますが、「この方位磁石は便利ですよ！」と勧めるような、よい意味での気軽さも大切にしながら、神さまのお手伝いをしていきたいと願います。

～分かち合い～

- ◇ バプテスマを受けている方はその前後、受けておられない方は教会にいらっしゃる前後で、生き方にどのような違いを感じますか。
- ◇ 「クリスチャン」をいわゆる「聖人君子」のように捉える方が、教会の外にはいらっしゃるように思います。こうした捉え方に、あなたはどうか答えますか。

(担当：郷 健人)

5/14-20 今週の聖書日課



5月14日(日)

ローマの信徒への手紙6章 1-14節

1では、どういうことになるのか。恵みが増すようにと、罪の中にとどまるべきだろうか。2決してそうではない。罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なおも罪の中に生きることができるでしょう。3それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。4わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。5もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。6わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。7死んだ者は、罪から解放されています。8わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。9そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。10キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。11このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

12従って、あなたがたの死ぬべき体を罪に支配させて、体の欲望に従うようなことがあってはなりません。13また、あなたがたの五体を不義のための道具として罪に任せてはなりません。かえって、自分自身を死者の中から生き返った者として神に献げ、また、五体を義のための道具として神に献げなさい。14なぜなら、罪は、もはや、あなたがたを支配することはないからです。あなたがたは律法の下ではなく、恵みの下にいます。

「わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」神さまの愛が心に注がれていく時、心は潤っていきます。私たちは先ず、心の窓を開いて御霊の注ぎを受け取っていく。その愛に喜び、感謝することが信仰生活なのではないでしょうか。

5月15日(月)

コリントの信徒への手紙二4章 7-15節

7ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。8わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、9虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。10わたしたちは、いつもイエスの死を体にまっています、イエスの命がこの体に現れるために。11わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています、死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために。12こうして、わたしたちの内には死

が働き、あなたがたの内には命が働いていることとなります。 13「わたしは信じた。それで、わたしは語った」と書いてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っているので、わたしたちも信じ、それだからこそ語ってもいます。 14主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています。 15すべてこれらのことは、あなたがたのためであり、多くの人々が豊かに恵みを受け、感謝の念に満ちて神に栄光を帰すようになるためです。

「土の器」とは人間の体を指しています。重要なのはその器の中身が何で満たされているかであるのですが、人はその器自体に目がいてしまいがちです。「イエスの死を体にまとっている」という表現は何だか怖いですが、パウロは自分のこの世での死を覚悟していたのだと思います。

5月16日（火）

ヨハネによる福音書 8章 31-36 節

31 イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。 32 あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」 33 すると、彼らは言った。「わたしたちはアブラハムの子孫です。今までだれかの奴隷になったことはありません。『あなたたちは自由になる』とどうして言われるのですか。」 34 イエスはお答えになった。「はっきり言うておく。罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である。 35 奴隷は家にいつまでもいるわけにはいかないが、子はいつまでもいる。 36 だから、もし子があなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる。

イエスさまを信じたユダヤ人の方々にも分かるようで理解し難い御言葉であり、戸惑っている様子が見られます。今までの教えには無い言葉だけれど、信じようと決めた（神さまに導かれ信じさせてもらえた）方なので、何とか理解しようとしていたのではないのでしょうか。

5月17日（水）

コリントの信徒への手紙一 6章 12-20 節

12「わたしには、すべてのことが許されている。」しかし、すべてのことが益になるわけではない。「わたしには、すべてのことが許されている。」しかし、わたしは何事にも支配されはしない。 13食物は腹のため、腹は食物のためにあるが、神はそのいずれをも滅ぼされます。体はみだらな行いのためではなく、主のためにあり、主は体のためにおられるのです。 14神は、主を復活させ、また、その力によってわたしたちをも復活させてくださいます。 15あなたがたは、自分の体がキリストの体の一部だとは知らないのか。キリストの体の一部を娼婦の体的一部分としてもよいのか。決してそうではない。 16娼婦と交わる者はその女と一つの体となる、ということを知らないのですか。「二人は一体となる」と言われています。 17しかし、主に結び付く者は主と一つの霊となるのです。 18みだらな行いを避けなさい。人が犯す罪はすべて体の外にあります。しかし、みだらな行いをする者は、自分の体に対して罪を犯しているのです。 19知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。 20あ

あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。

月曜日に「土の器よりも中身が」というコメントをしましたが、聖霊が宿ってくださる神殿である体も大切でした。「自分の体で神の栄光を現しなさい」、私は神の栄光とは程遠い体ですけど・・・となってしまいますが、外観のことではなく、行いに関する言葉ですね。

5月18日（木）

使徒言行録7章54節-8章3節

54 人々はこれを聞いて激しく怒り、ステファノに向かって歯ぎしりした。 55 ステファノは聖霊に満たされ、天を見つめ、神の栄光と神の右に立っておられるイエスとを見て、 56 「天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える」と言った。 57 人々は大声で叫びながら耳を手でふさぎ、ステファノ目がけて一斉に襲いかかり、 58 都の外に引きずり出して石を投げ始めた。証人たちは、自分の着ている物をサウロという若者の足もとに置いた。 59 人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と言った。 60 それから、ひざまずいて、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と大声で叫んだ。ステファノはこう言って、眠りについた。1 サウロは、ステファノの殺害に賛成していた。

その日、エルサレムの教会に対して大迫害が起こり、使徒たちのほかは皆、ユダヤとサマリアの地方に散って行った。 2 しかし、信仰深い人々がステファノを葬り、彼のことを思って大変悲しんだ。

3 一方、サウロは家から家へと押し入って教会を荒らし、男女を問わず引き出して牢に送っていた。

ステファノに襲いかかった人々、正しいことを言われ、自分たちが間違っていると認めることへの恐怖、その恐怖自体を無くしてしまおうとする凶行。ステファノのこの時の振る舞いはまるでイエスさまのようです。実際にイエスさまの振る舞いを間近で見ていたのだと思いますし、「イエスさまのような方になりたい」とお慕いしていたのだと思います。それでも死の恐怖に直面したら、自分の力でそのように振る舞うことはまず出来ません。神さまがステファノの定められた運命を思い、聖霊を満たして下さったの振る舞いであったのだと私は思います。

5月19日（金）

ガラテヤ書1章11-24節

11 兄弟たち、あなたがたにはっきり言います。わたしが告げ知らせた福音は、人によるものではありません。 12 わたしはこの福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされたのです。

13 あなたがたは、わたしがかつてユダヤ教徒としてどのようにふるまっていたかを聞いています。わたしは、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。 14 また、先祖からの伝承を守るのに人一倍熱心で、同胞の間では同じ年ごろの多くの者よりもユダヤ教に徹しようとしていました。 15 しかし、わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神が、御心のままに、 16 御子をわたしに示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされたとき、わたしは、すぐ血肉に相談するようなことはせず、 17 また、エルサレムに上って、わたしより先に使徒

として召された人たちのもとに行くこともせず、アラビアに退いて、そこから再びダマスコに戻ったのでした。

18 それから三年後、ケファと知り合いになろうとしてエルサレムに上り、十五日間彼のもとに滞在しましたが、19ほかの使徒にはだれにも会わず、ただ主の兄弟ヤコブにだけ会いました。20わたしがこのように書いていることは、神の御前で断言しますが、うそをついているのではありません。21その後、わたしはシリアおよびキリキアの地方へ行きました。22キリストに結ばれているユダヤの諸教会の人々とは、顔見知りではありませんでした。23ただ彼らは、「かつて我々を迫害した者が、あの当時滅ぼそうとしていた信仰を、今は福音として告げ知らせている」と聞いて、24わたしのことで神をほめたたえておりました。

ステファノの殺害に加担していたサウロと呼ばれていた頃のパウロに対して、神さまに赦されているとしても使徒達の人情としては受け入れ難い状況であったことがパウロの行動からも分かります。それを素直に手紙に書いている所はパウロの、神さまに対して正しい人あろうとする熱心さ、愚直さが現れています。

5月20日（土）

申命記5章 17-21 節

17 殺してはならない。

18 姦淫してはならない。

19 盗んではならない。

20 隣人に関して偽証してはならない。

21 あなたの隣人の妻を欲してはならない。隣人の家、畑、男女の奴隷、牛、ろばなど、隣人のものを一切欲しがってはならない。」

十戒の後半の部分です。最後の「隣人のものを一切欲しがってはならない。」は欲しがるくらいなら・・・と思ってしまうですが、行動をしなくても思うだけで罪に値する。正しい心であろうと努めることが大切なことなのですね。

（担当：栗山 義亜）

第8課「望まない悪を行うわたし」

聖書箇所： ローマの信徒への手紙 7章 7-25節

主題聖句： あなたがたは律法の下ではなく、恵みの下にいるのです。(6:14)

ローマの信徒への手紙の7章では「律法からの解放」1節～6節と、「私のうちなる罪」7節～25節について書かれています。信仰によって義とされた者は、律法とその働きの下ではなく、聖霊の支配下にあるのだということを語っています。「律法からの解放」とは、永遠の命へ至る神の恵みに賜り生かされていくことです。

パウロがなぜここで律法からの解放を問題にするのかというと、自分勝手に律法を廃棄する無律法主義では、真の罪からの解放にはならないからです。

未だ訪れていないローマの信徒たちに向けて書かれたこの手紙は、言うなれば世界中の人々に伝えなかったパウロの思いであり、「律法からの解放」という、難しくも信仰生活を送る上で最も大切であり、つまづきのきっかけともなりうる罪の問題を愛情をもって語って下さったのだと思います。

パウロは、律法からの解放を、律法そのものにより証明しようとしてしました。そして、当時よく知られていた婚姻関係を事例として挙げます。

律法は本来、「人が生きている間のみ支配できるもの」であるという点に、結婚の比喩を通してパウロは注意を向けさせます。通常「律法を知っている人々」とは、ユダヤ人を指しますが、この手紙の最初の読者の多くがユダヤ人ではなかったことも合わせて、ここで語られる律法はユダヤ教の律法『トーラー』には限定されてはならず、より広く『法律で決められている秩序』というニュアンスで語られています。

2節～3節で語られる比喩はわかりやすく書かれています。律法をより理解して欲しいという点においては、説得性が高いとは言えないというのが見解のようです。

1節には「人を生きている間だけ支配するもの」とありますが、律法=夫とは語っておらず、しかし「夫が死ねば、自分を夫に結び付けていた律法から解放されるのです。」(2節)と、死による拘束性の解除を表しています。この2節は、第一コリント7章39節で、「妻は夫が生きている間は夫に結ばれていますが」という箇所の書き方と類似しています。しかし第一コリントにおいては、律法という言葉は使用しておらず、異なった解釈として、律法という意味が含まれていると思われる。

では、律法からの解放とはどのように捉えればよいのでしょうか。キリスト者においては、「キリストの体」において起こったことであり、十字架において起こったことと捉えることができます。つまり、バプテスマにおいて実現する「からだの死」、「新たにされた誕生の時」を通して、律法からの解放が成されていると考えることができるということです。6節で「わたしたちは、自分を縛っていた律法に対して死んだ者となり、律法から解放されています。」と再び語られ、6章11節の「あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。」に応答しているとも考えられます。

そして続く「その結果、文字に従う古い生き方ではなく、“霊”に従う新しい生き方で仕えるようになっていくのです。」と、わたしたちに問いかけるように示されます。

「霊に従う新しい生き方」とは、6章4節の「わたしたちは洗礼〔バプテスマ〕によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。」と同じ表現です。そして新しくされたわたしたちが「仕えるように」とは、6章6節の「もはや罪の奴隷にならないため」という否定的な意味ではなく、肯定的に「霊に従う新しい生き方を行いなさい」とわたしたちに示してくださっています。

前半の主の問いかけに続いて、今回の聖書箇所を見てまいりましょう。

内在する罪の問題に対して、7節の「では、どういうことになるのか。」という対論形式で始まる、ここでの問いの内容は、5節を直接受けていると思われます。

5節「わたしたちが肉に従って生きている間は、罪へ誘う欲情が律法によって五体の中に働き、死に至る実を結んでいました。」

7節「では、どういうことになるのか。律法は罪であろうか。決してそうではない。しかし、律法によらなければ、わたしは罪を知らなかったでしょう。たとえば、律法が「むさぼるな」と言わなかったら、わたしは、むさぼりを知らなかったでしょう。」

この罪に対する問答から始まる7章7節～25節の内容は、「罪」「掟」「霊」「律法」「法則」という言葉で私たちに語ってくださいます。信仰における霊的な自分と、肉による罪に自分を売り渡してしまう自分、決して心では望まないことを、実行してしまうという、人間の弱さと愚かさを、突きつけられる思いがいたします。

7節の「わたしは罪を知らなかったでしょう。」の「わたし」とは誰のことを指しているのでしょうか。パウロ個人でしょうか、しかしその場合は回心以前のパウロを指すのか、現在のパウロなのか……。それとも、この「わたし」は、人間一般を指しているのでしょうか……。皆さまはどう思われますでしょうか。

律法＝罪という等式は成立しません。しかし、罪の体験においては律法が深く関係していることが書かれています。「むさぼるな」という具体的な「掟」を持ちだして論証がされ、8節では更にこのことについて、説明をしています。

「律法がなければ罪は死んでいるのです。」を理解するにあたり、5章13節の「律法が与えられる前にも罪は世にあったが、律法がなければ罪は罪と認められないわけです。」や5章20節の「律法が入り込んで来たのは、罪が増し加わるためでありました。」が重要になってくると思われます。さらに、4章15節で既に語られている「律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反もありません。」との語りかけにより、道徳や自然法（不変的に守られる法）ではない理解が成されると思います。

難しく理解困難な表現が続きますが、11節の「罪は掟によって機会を得、わたしを欺き、そして、掟によってわたしを殺してしまったのです。」は、何を意味しているのでしょうか。このことは十字架上のイエスさまのことを表しているのですが、ここでのメッセージは、十字架上のイエスさまに人間が共鳴共振できているのかという問いかけであるとも思われます。罪は、作為的な人為的な掟があるからこそ罪としての意味を持ち、私たち全ての人間を裁きます。そして、人為的な掟が君臨していることによって、掟に従う者たちの魂を支配し、滅ぼしへと向かわせているのではないのでしょうか。その上で、十字架に架かれたイエスさまの思い、すなわち、神さまの「痛み」と神さまからの「喜び」と「罪からの救済」に共振しているかと問われていることに、気づかなければならないのだと思わされます。

ロマ書とも言われるローマの信徒への手紙は、ルターの宗教改革の根本理念だと言われています。人はその善行によって救われるのではなく、神が人を義（正しい）と認めることによって救われるのだという、信仰義認論という説です。

7章においては、「律法」「罪」「掟」そして、「肉なる人間」との関係性を、内在する罪に厳しく言及する形で語って下さっています。

24節では「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。」という自己認識は、律法の可能性や人間の可能性の幻想であり、福音の到来が語られる25説との対比として読むことができます。25説での感謝の言葉をもって、「わたし」の内的葛藤の肯定へと歩み出し、信仰者としての現在の姿を語り、8章で語られる、義とされた者の終末論的現実と続きます。8章に入ってすぐの勝利宣言は、信仰義認論の結論であると共に、「神の義」神のその民への約束の確実さを、唯一イエス・キリストのみによることとして、あらたな議論へと導いていると言えるでしょう。

難しく考えることなく、私たちは日々、自らの罪を告白し赦しを乞い、神のお導きに素直に従う時、「罪は、もはや、あなたがたを支配することはないのです。」(6章14節)と語り「あなたがたは律法の下ではなく、恵みの下にいます。」(6章14節)とおっしゃって下さっています。痛みを持って心からの祈りをお捧げするお一人おひとりを、主は愛して下さいます。

～分かち合い～

- ◇ 罪を告白する時、素直に口にすることは難しいという経験はありますか？
今だから言えるという経験を分かち合ってみましょう。

(担当：岩崎 秀子)

5/21-27 今週の聖書日課



5月21日(日)

ローマの信徒への手紙 7章 7-25 節

7では、どういうことになるのか。律法は罪であろうか。決してそうではない。しかし、律法によらなければ、わたしは罪を知らなかったでしょう。たとえば、律法が「むさぼるな」と言わなかったら、わたしはむさぼりを知らなかったでしょう。8ところが、罪は掟によって機会を得、あらゆる種類のむさぼりをわたしの内に起こしました。律法がなければ罪は死んでいるのです。9わたしは、かつては律法とかかわりなく生きていました。しかし、掟が登場したとき、罪が生き返って、10わたしは死にました。そして、命をもたらすはずの掟が、死に導くものであることが分かりました。11罪は掟によって機会を得、わたしを欺き、そして、掟によってわたしを殺してしまったのです。12こういうわけで、律法は聖なるものであり、掟も聖であり、正しく、そして善いものなのです。

13 それでは、善いものがわたしにとって死をもたらすものとなったのだろうか。決してそうではない。実は、罪がその正体を現すために、善いものを通してわたしに死をもたらしたのです。このようにして、罪は限りなく邪悪なものであることが、掟を通して示されたのでした。14 わたしたちは、律法が霊的なものであると知っています。しかし、わたしは肉の人であり、罪に売り渡されています。15 わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。16 もし、望まないことを行っているとすれば、律法を善いものとして認めているわけになります。17 そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。18 わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。19 わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。20 もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。21 それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまとっているという法則に気づきます。22 「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、23 わたしの五体にはもう一つの法則があって心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。24 わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。25 わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えています、肉では罪の法則に仕えているのです。

「律法によらなければ、私は罪を知らなかったでしょう。」アーメンです。律法が無ければ私たちは罪に気付くことはありませんでした。「私は自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。・・・私の中に住んでいる罪なのです。」19、20 節 律法には罪を炙り出しても救う力はありません。内在する罪の身体から救って下さるためにイエスさまが来て下さったことを神さまに感謝いたします。日々悔い改めた後、その罪を自分で責め続けず赦された感謝を持って歩みたいです。

5月22日（月）

コリントの信徒への手紙一 15章 53-58節

53 この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります。54 この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、次のように書かれている言葉が実現するのです。

「死は勝利にのみ込まれた。

55 死よ、お前の勝利はどこにあるのか。

死よ、お前のとげはどこにあるのか。」

56 死のとげは罪であり、罪の力は律法です。57 わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。58 わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずですよ。

日々生活している中で、人生の海の嵐が襲う時があります。小さい波もあれば大きい波もあります。が、「動かないようにしっかり立ち主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決してむだにならない・・・」と言われます。又パウロは死についても言及していて、「わたしたちは皆、今とは異なる(霊の)状態に置かれます。」「死は(復活のイエスさまと同じ様に)勝利に飲み込まれた。」と言われます。希望にアーメン、アーメンです。

5月23日（火）

コリントの信徒への手紙二 4章 16-18節

16 だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。17 わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。18 わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

生まれながらの性格や欲望は衰えて、新しいいのちの内なる人は日々新たにされ、いつときの軽い艱難は永遠の栄光に変えられますとあります。信仰故のパウロの艱難はとても軽いとは言えませんが、後の富栄えた力強い永遠の栄光には比べられないと言います。イエスさまは昨日も今日も明日も変わらず、主にあって良い時だけでなく、私たちの弱さや時に主にある辛さも全てを含めて分かってくださり栄光へと変えて下さいます。年を重ねても日々新たに下さる主に感謝いたします。

5月24日（水）

ローマの信徒への手紙 8章 1-7節

1 従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。2 キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。3

肉の弱さのために律法がなしえなかったことを、神はしてくださったのです。つまり、罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです。4 それは、肉ではなく霊に従って歩むわたしたちの内に、律法の要求が満たされるためでした。5 肉に従って歩む者は、肉に属することを考え、霊に従って歩む者は、霊に属することを考えます。6 肉の思いは死であり、霊の思いは命と平和であります。7 なぜなら、肉の思いに従う者は、神に敵対しており、神の律法に従っていないからです。従えないのです。

「キリストは神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、・・僕の身分になり人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって死にいたるまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」フィリピ 2:6~8 神さまは律法ではできなかったことを、ご自分の御子を私たちの罪のために、罪深い肉(人間)と同じような形でお使になり、肉において罪を処刑されることにより私たちを死からのちへと解放して下さいました。考えられない恩寵です。

5月25日(木)

ヤコブの手紙 5章 7-20 節

7 兄弟たち、主が来られるときまで忍耐しなさい。農夫は、秋の雨と春の雨が降るまで忍耐しながら、大地の尊い実りを待つのです。8 あなたがたも忍耐しなさい。心を固く保ちなさい。主が来られる時が迫っているからです。9 兄弟たち、裁きを受けないようにするためには、互いに不平を言わぬことです。裁く方が戸口に立っておられます。10 兄弟たち、主の名によって語った預言者たちを、辛抱と忍耐の模範としなさい。11 忍耐した人たちは幸せだと、わたしたちは思います。あなたがたは、ヨブの忍耐について聞き、主が最後にどのようにしてくださったかを知っています。主は慈しみ深く、憐れみに満ちた方だからです。

12 わたしの兄弟たち、何よりもまず、誓いを立ててはなりません。天や地を指して、あるいは、そのほかどんな誓い方によってであろうと。裁きを受けないようにするために、あなたがたは「然り」は「然り」とし、「否」は「否」としなさい。

13 あなたがたの中で苦しんでいる人は、祈りなさい。喜んでいる人は、賛美の歌をうたいなさい。14 あなたがたの中で病気の人は、教会の長老を招いて、主の名によってオリーブ油を塗り、祈ってもらいなさい。15 信仰に基づく祈りは、病人を救い、主がその人を起き上がらせてくださいます。その人が罪を犯したのであれば、主が赦してくださいます。16 だから、主にいやしていただくために、罪を告白し合い、互いのために祈りなさい。正しい人の祈りは、大きな力があり、効果をもたらします。17 エリヤは、わたしたちと同じような人間でしたが、雨が降らないようにと熱心に祈ったところ、三年半にわたって地上に雨が降りませんでした。18 しかし、再び祈ったところ、天から雨が降り、地は実をみのらせました。

19 わたしの兄弟たち、あなたがたの中に真理から迷い出た者がいて、だれかがその人を真理へ連れ戻すならば、20 罪人を迷いの道から連れ戻す人は、その罪人の魂を死から救い出し、多くの罪を覆うことになる、知るべきです。

主の日は近いので農夫や預言者を見習って、不平を言わずに忍耐するように、心を固く保つように言われます。主は慈しみ深く憐れみに満ちた方だから、ヨブの忍耐と最後どうなったかも知っていますねと励まして下さいます。私は忍耐の足りない者であることを自分がよく知っています。故に不平を言わずに済むように、苦しい時や執りなしのためお祈りをして主に訴え、喜びの時には感謝の賛美を捧げると言うシンプルな信仰生活を送ることが許されれば幸いと願っています。

5月26日(金)

使徒言行録 10章 9-33節

9翌日、この三人が旅をしてヤッファの町に近づいたころ、ペトロは祈るため屋上に上がった。昼の十二時ごろである。10彼は空腹を覚え、何か食べたいと思った。人々が食事の準備をしているうちに、ペトロは我を忘れたようになり、11天が開き、大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、地上に下りて来るのを見た。12その中には、あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥が入っていた。13そして、「ペトロよ、身を起こし、屠って食べなさい」と言う声がした。14しかし、ペトロは言った。

「主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は何一つ食べたことはありません。」15すると、また声が聞こえてきた。「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。」16こういうことが三度あり、その入れ物は急に天に引き上げられた。

17ペトロが、今見た幻はいったい何だろうか、ひとりで思案に暮れていると、コルネリウスから差し向けられた人々が、シモンの家を探し当てて門口に立ち、18声をかけて、「ペトロと呼ばれるシモンという方が、ここに泊まっておられますか」と尋ねた。19ペトロがなおも幻について考え込んでいると、“霊”がこう言った。「三人の者があなたを探しに来ている。20立って下に行き、ためらわないで一緒に出発しなさい。わたしがあの者たちをよこしたのだ。」21ペトロは、その人々のところへ降りて行って、「あなたがたが探しているのは、このわたしです。どうして、ここへ来られたのですか」と言った。22すると、彼らは言った。「百人隊長のコルネリウスは、正しい人で神を畏れ、すべてのユダヤ人に評判の良い人ですが、あなたを家に招いて話を聞くようにと、聖なる天使からお告げを受けたのです。」23それで、ペトロはその人たちを迎え入れ、泊まらせた。

翌日、ペトロはそこをたち、彼らと出かけた。ヤッファの兄弟も何人か一緒に行った。24次の日、一行はカイサリアに到着した。コルネリウスは親類や親しい友人を呼び集めて待っていた。25ペトロが来ると、コルネリウスは迎えに出て、足もとにひれ伏して拝んだ。26ペトロは彼を起こして言った。「お立ちください。わたしもただの人間です。」27そして、話しながら家に入ってみると、大勢の人が集まっていたので、28彼らに言った。「あなたがたもご存じのとおり、ユダヤ人が外国人と交際したり、外国人を訪問したりすることは、律法で禁じられています。けれども、神はわたしに、どんな人をも清くない者とか、汚れている者とか言うてはならないと、お示しになりました。29それで、お招きを受けたとき、すぐ来たのです。お尋ねしますが、なぜ招いてくださったのですか。」30すると、コルネリウスが言った。「四日前の今ごろのことです。わたしが家で午後三時の祈りをしていましたと、輝く服を着た人がわたしの前に立って、31言うのです。『コルネリウス、あなたの祈りは聞き入れられ、あなたの施しは神の前で覚えられた。32ヤッファに人を送って、ペトロと呼ばれる

シモンを招きなさい。その人は、海岸にある皮なめし職人シモンの家に泊まっている。』³³それで、早速あなたのところに人を送ったのです。よくおいでくださいました。今わたしたちは皆、主があなたにお命じになったことを残らず聞こうとして、神の前にいるのです。」

主のご意思の実現のために、細かな神さまのご配慮が次々に展開されています。イエスさまはユダヤ人、異邦人を含む強い人弱い人、全ての人のために死んでくださったのです。コルネリオの従順とペトロの服従によって福音宣教の新たな展開が始められ、神さまの御旨が成就されました。私たちクリスチャンの巡り合いは神さまのご摂理の中にあります。小さなご奉仕や友との出会いにも、主のお導きと祝福があることを感謝いたします。

5月27日（土）

イザヤ書 65章 17-25節

17 見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。

初めからのことを思い起こす者はない。

それはだれの心にも上ることはない。

18 代々としえに喜び楽しみ、喜び躍れ。

わたしは創造する。

見よ、わたしはエルサレムを喜び躍るものとして

その民を喜び楽しむものとして、創造する。

19 わたしはエルサレムを喜びとし

わたしの民を楽しみとする。

泣く声、叫ぶ声は、再びその中に響くことがない。

20 そこには、もはや若死にする者も

年老いて長寿を満たさない者もなくなる。

百歳で死ぬ者は若者とされ

百歳に達しない者は呪われた者とされる。

21 彼らは家を建てて住み

ぶどうを植えてその実を食べる。

22 彼らが建てたものに他国人が住むことはなく

彼らが植えたものを

他国人が食べることもない。

わたしの民の一生は木の一生のようになり

わたしに選ばれた者らは

彼らの手の業にまさって長らえる。

23 彼らは無駄に労することなく

生まれた子を死の恐怖に渡すこともない。

彼らは、その子孫も共に

主に祝福された者の一族となる。

24 彼らが呼びかけるより先に、わたしは答え

まだ語りかけている間に、聞き届ける。

25 狼と小羊は共に草をはみ

獅子は牛のようにわらを食べ、蛇は塵を食べ物とし

わたしの聖なる山のどこにおいても

害することも滅ぼすこともない、と主は言われる。

神さまの選び、律法、エルサレムや伝承にしがみつき、その枠から出て神さまの救いを考えられないイスラエルの前に「新しい祝福の約束」を語ります。新しい民全体は喜んでいて、罪から解放され労働が喜びと祝福の業となるとあります。その中でも一番の祝福は神さまと人との関係の回復です。「彼らが呼びかけるより先に、わたしは答え まだ語りかけている間に聞き届ける。」24節 神さまの絶対のご愛に感謝いたします。

(担当：渡部 和子)



第9課「霊の執り成し」

聖書箇所： ローマの信徒への手紙 8章 18-30節

主題聖句： 神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召し出された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、私たちは知っています。

(8:28)

本日の聖書箇所の前の部分(8章1~17節)で、パウロは、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはない、神の霊が私たちの内に宿っておられる限り、私たちは生きると書いています。神の霊によって導かれる者は、神の子であるとも書かれています。この霊によって、恐れは取り除かれ、神の相続人として、しかも、キリストと共同の相続人として、栄光を受けることを約束されているのです。

将来、私たちに現されるはずの栄光と比べると、現在の苦しみは取るに足らないとパウロは続けます。クリスチャンになったからといって、苦しみがなくなるわけではありません。私たちの人生には様々な苦難があります。私たちは苦難の先にある栄光を待ち望んでいるのですが、それは、私たち人間だけではありません。被造物も虚無に服しながら、神の子たちが現れるのを切に待ち望んでいるのです。人間も神さまの被造物ですが、ここでいう「被造物」は人間を含めていません。

天地創造において、神さまは、お創りになった世界を見て、「見よ、それは極めて良かった」とおっしゃいました。しかし、今や世界は壊れ、被造物も苦しみの中にあり、呻いているというのです。人間の身勝手な行動の結果の異常気象や自然破壊、絶滅の危機に瀕しているさまざまな生物。これら被造物も人間も、滅びに向かって呻いています。これは、ただの嘆きではなく、救われることを待ち望む呻きです。どのような救い、栄光が待っているのか、私たちにわかりません。しかし、パウロは、目に見えるものに対する希望は希望ではないと言います。人間は想像力が乏しく、自分の知識の範囲外、経験の範囲外のことを考えるのは難しいことが多々あります。しかし、神さまは、私たちの創造をはるかに超えるお方であり、神さまの力は私たちの考えの遠く及ばないところまで行き渡ります。

神さまによって栄光がもたらされることが約束されているという希望とともに、今の苦しみの時を過ごす私たちの助けとなるのが、“霊”です。私たちがどう祈るべきかわからない時、“霊”は神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるのです(27節)。

私たちが祈る時、自分の願いばかりの祈りになってしまうことがあります。

皆さんは、「請求書の祈り」「領収書の祈り」という言葉を聞いたことがありますか？

「こうしてください」「ああしてください」「こうなることを願います」と、自分の希望を神さまにお伝えするのが「請求書の祈り」です。このような願いが悪いというわけではありません。神さまは私たちの願いを全てご存知で、それを心から祈り求める時、御心にかなう形で叶えてくださるお方です。しかし、それよりも大切なことは、今、まだ実現していないことであっても、「このようにして下さって、ありがとうございます」と、必ず聞き入れてくださることを信じて、感謝して、祈る「領収書の祈り」なのです。

キリスト教の信仰は、過去から現在を見るのではなく、未来から現在を見る信仰といえます。過去にこのようなことをしたから、今このような状況になっていると考えるのではなく、未来に実現することが約束されている神さまの祝福のご計画のために、今のこの状況があると考えのです。

神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召し出された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、私たちは知っています（28節）。

今はわからなくても、将来の栄光のために今の苦しみが必要であること、それが、神さまのご計画であることを信じて、神さまからの恵みを一つも無駄にしないように与えられた人生を歩んでまいりましょう。

また、今日（5月28日）はペンテコステです。多くの弟子たちに聖霊が下り、聖霊を受けた弟子たちが、恐れず、大胆に、主イエス・キリストについて語り始めた日です。弱い私たちのつたない祈りを“霊”が執り成してくださることに感謝して、聖霊に満たされて、日々、主イエス・キリストを証ししてまいりましょう。

～分かち合い～

◇ 祈る時に気をつけていることはありますか？

◇ 聖霊に満たされていると感じるときはどのような時ですか？

（担当：田中 由記子）

5/28-6/3 今週の聖書日課



5月28日(日)

ローマの信徒への手紙 8章 18-30節

18 現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないといわたしは思います。19 被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。20 被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。21 つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。22 被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。23 被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。24 わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。25 わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。

26 同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。27 人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるかを知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです。28 神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということ、わたしたちは知っています。29 神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くの兄弟の中で長子となられるためです。30 神はあらかじめ定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになったのです。

神さまの造られたすべての被造物は皆同じです。生まれ生かされそして死んでいきます。でも皆希望を持っています。あなたによって神の子とされる事を、栄光に輝く自由にあずかれる事に。そして霊も神さまのみ心に従って、私たちを助けて下さいます。万事を益となるようにして下さい。神さまはすべてのものを愛されています。

5月29日(月)

ヨハネによる福音書 20章 19-23節

19 その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。20 そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。21 イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」22 そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。23 だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

「あなたがたに平和があるように」主は2度も言われました。私と同様にあなたがたをを遣わす。そして息を吹きかけて言われました「聖霊を受けなさい」これは私たちにも言われているのですね。イエスさま感謝致します。

5月30日(火)

ルカによる福音書 11章 1-2節、22章 31-32節

1 イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った。2そこで、イエスは言われた。「祈るときには、こう言いなさい。

『父よ、
御名が崇められますように。
御国が来ますように。

~~~~~

31「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。32しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

祈るときはこう祈りさい。イエスさまは、私たちがいつも唱えている「主の祈り」を教えてくださいました。そして信仰がなくならないようにと祈ってくださいました。イエスさまはいつも私たちの事を思って下さいます。感謝致します。

## 5月31日(水)

### 使徒言行録 9章 10-19節

10 ところで、ダマスコにアナニアという弟子がいた。幻の中で主が、「アナニア」と呼びかけると、アナニアは、「主よ、ここにおります」と言った。11すると、主は言われた。「立って、『直線通り』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウロという名の、タルソス出身の者を訪ねよ。今、彼は祈っている。12アナニアという人が入って来て自分の上に手を置き、元どおり目が見えるようにしてくれるのを、幻で見たのだ。」13しかし、アナニアは答えた。「主よ、わたしは、その人がエルサレムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。14ここでも、御名を呼び求める人をすべて捕らえるため、祭司長たちから権限を受けています。」15すると、主は言われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。16わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。」17そこで、アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。」18すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起こして洗礼を受け、19食事をして元気を取り戻した。

アナニアはサウルの上に手を置いて言った。兄弟サウル、目が見えるように、そして聖霊で満たされるように」サウルは目が見えるようになり、身を起こしてバプテスマを受けました。私たちがバプテスマを受けた時、聖霊に満たされていたのですね。

## 6月1日(木)

### 申命記 30章 11-14節

11 わたしが今日あなたに命じるこの戒めは難しすぎるものでもなく、遠く及ばぬものでもない。 12 それは天にあるものではないから、「だれかが天に昇り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。 13 海のかなたにあるものでもないから、「だれかが海のかなたに渡り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。 14 御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる。

み言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる。行いましょう。私のために、みんなの喜びのために。

## 6月2日(金)

### ヨエル書 3章 1-5節

1 その後

わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。

あなたたちの息子や娘は預言し

老人は夢を見、若者は幻を見る。

2 その日、わたしは

奴隷となっている男女にもわが霊を注ぐ。

3 天と地に、しるしを示す。

それは、血と火と煙の柱である。

4 主の日、大いなる恐るべき日が来る前に

太陽は闇に、月は血に変わる。

5 しかし、主の御名を呼ぶ者は皆、救われる。

主が言われたように

シオンの山、エルサレムには逃げ場があり

主が呼ばれる残りの者はそこにいる。

わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。主の御名を呼ぶ者は皆、救われる。聖霊には春風のように皆の心に注がれます。主よ、あなたのみ手の中にいます事に感謝致します。

6月3日(土)

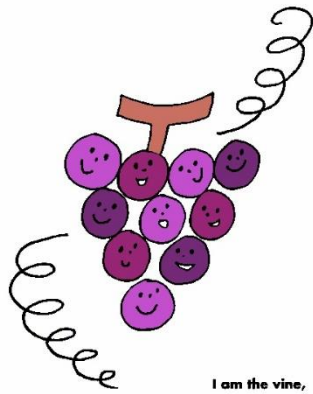
マルコによる福音書 9章 20-24 節

20 人々は息子をイエスのところに連れて来た。霊は、イエスを見ると、すぐにその子を引寄せさせた。その子は地面に倒れ、転び回って泡を吹いた。 21 イエスは父親に、「このようになったのは、いつごろからか」とお尋ねになった。父親は言った。「幼い時からです。 22 霊は息子を殺そうとして、もう何度も火の中や水の中に投げ込みました。おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください。」 23 イエスは言われた。「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる。」 24 その子の父親はすぐに叫んだ。「信じます。信仰のないわたしをお助けください。」

「おできになるならば・・・」その言葉には半信半疑があります。イエスさまは「できれば」と言うか。「信じる者には何でもできる」父親はすぐに叫んだ。「信じます。信仰のないわたしをお助けください」イエスさまの言われるように「信じましょう！」この方こそ助けて下さいます。イエスさまを信じる事で、私の心も強くなれます。感謝致します。

(担当：小沢 敬一)





I am the vine,  
you are the branches  
John 15:5

2023.5 成人科